
ゴシヨクノモノガタリ

DONGURI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴシヨクノモノガタリ

【Nコード】

N7739P

【作者名】

DONGURI

【あらすじ】

ここは貴方が知っている世界とは別の場所・・・この世界の人達には、チームを作ってバトルをするという習慣がありました。これから始まる物語は、神に選ばれた者達のお話。

チーム&人物紹介

チーム&人物紹介

ファイブ
カラーズ
five / colors

黄利あつり：引きこもりがちな少年。顔が童顔という事が悩み黄色カラーの色の精霊エアリーを操る事が出来る。武器は紙とペン。印は二の腕（右）。

青水せいすい：黄利の幼馴染。家も隣で、とっても仲良し。青の色の精霊を操る事が出来る。武器は日本刀。印は手の甲（左）。

紅亜べにあ：今、一番人気のアイドル。可愛い物が大好き。赤の色の精霊を操る事が出来る武器は弓矢。印は背中（ド真ん中）。

緑葉りょくは：そこそこ人気のモデル。かなりのDS。緑の色の精霊を操る事が出来る。武器は鉄の棒。印は太もも（左）。

橙陽とうび：歌手で、好奇心旺盛な少女。少しマイペース。橙色だいたいいろの色の精霊を操ることが出来る。武器は拳銃。印は足の甲（右）。

The darkザ・ダーク：黒羅率こくろいる悪いチーム。町や、村を荒らすため、評判が良くない。組織化しつつある。

Hell&Heavenヘルヘヴン：ファイブ/カラーズの、味方をしてくれない、悪い事もしたりする謎多きチーム。

ゴッド・スター・シャイン：ファイブ/カラーズが旅をすることになったきっかけをつくった人物。意地悪な女神様。通称、ゴスシャさん。

チーム&人物紹介(後書き)

小説の内容は、また今度になります。

すみません。(私も忙しいので・・・)

よければ、楽しみに待っていてください。

黄利君は引きこもり!?

ラマル村

それはとても小さな田舎の村。その中の一軒の家で金髪の少年、黄利はテレビゲームをしていた。

午前7:30分、黄利の家。

ドアからノックする音が聞こえた。ノックをしているのが母だとわかった黄利はゲームをポーズすると、部屋のドアを開けた。

「黄利、清水君が来たけど、どうする？」

母に問われたので、コクツと黄利はうなずき、黄利はまたゲームに目をもどした。しばらく経つと、黄利の部屋に清水が入って来た。

一回溜息をつき、清水を見つめる黄利。黄利の事をじつと見つめる清水。二人はお互いをしばらく曇った顔で見つめ合った。

「おまえ、引きこもってから、一ヶ月ぐらいたっただろ・・・だからもうそろそろ学校に行った方がいいと俺は思う・・・」

先に口を開いたのは清水だった。黄利の方も今日こそ学校へ行こうと決心していたらしく、笑顔でコクコク頷いている。

午前7:56分、隣の学校『スプラ学園』

ラマル村には学校が無いので、わざわざ隣町まで行かなければならないのだ。黄利が教室のドアを開けた瞬間・・・

「あ！黄利君が、来た〜！」

一人の女子がそう叫んだ瞬間、女子達が雪崩のように黄利の方へ押し寄せて来た。黄利の方は清水の手を固く握っている。清水は握られている手から、黄利の不安を感じ取った。黄利が女子達を嫌がっている理由、それは・・・黄利が童顔で、この世界にいる人間の中で僅かしかない色の精霊カラーフェアリーを操ることのできる人間、『精霊の操り人』だからである。それで女子達みんな黄利に興味を持ち、ほっぺを突っついたり、抓ったりするのだ。それを黄利はいじめだと思

込み、引きこもりになってしまった。一方青水の周りには、男子達が集まって来ている。

「青水さん、俺、マドレー又作って来たんですよ。良かったら食べて下さい！」

青水はどちらかと言うと、男にモテるタイプなのである。青水がモテる理由も、精霊の操り人なのと、クール（というより、あまりしゃべることが好きではない）さが、作用しているらしい。

昔のこの世界の人間は、精霊の操り人しかいなかったらしいが、別の世界から人間が乗り込んできて、次々と精霊の操り人達を殺していったらしい。その精霊の操り人の生き残りの子孫が、黄利たちなのである。今では精霊の操り人は貴重な人間とされていて、精霊の操り人を殺すと死刑になるほどの重い罪なのである。

なので、スプラ学園に二人しかない精霊の操り人の黄利と青水は特別扱い（？）されている。色の精霊には属性があり、色で振り分けられている。精霊の操り人は十三歳になると、パートナーの色の精霊が憑くのだ。明日は黄利の誕生日で、ついに十三歳になる。その明々後日には青水の誕生日で同じく十三歳になる。二人はパートナーになる精霊がどんなものなのか、気になって仕方がなかった。

この世界の人達には、チームをつくってバトルをする習慣があり、このクラスでも男子だけのチームと女子だけのチームに分かれている。男子のチームは『クールボーイズ』、女子のチームは『キューティーガールズ』、もちろん先生たちもつくっている。その名前は『スーパーターチャーズ』。リーダーは校長先生。副リーダーは副校長先生である。しかし、黄利と青水はどのチームにも所属していない。いつか自分たちのチームをつくるのが夢だからである。チームは三人以上で成り立つもので、メンバーは校長先生に頼んで朝会などで募集してもらったり、自分たちでスカウトしたりしても良いのだ。黄利と青水は、黄利をリーダーにして『カライズcolors』というチームをつくるのが目標。しかし、最後の一人がなかなか現れないのである。

午後3：30分

学校の帰り道。黄利と青水は疲れきって、とぼとぼあるいていた。二人の目の前に水晶玉の様な物が転がっている。それはとても澄んでいる玉だった。

「あゝ！？なんだこりゃ？なんで道のど真ん中にこんな物が落ちてんだ？」

青水はそう言つてその玉を蹴り飛ばしてしまった。その玉は見事に粉々に。すると・・・

「おぬし達！今割つたものが何か、分かっているのか！それは私の七十三番目の魂なのだぞ！どう償うつもりじゃ！！！」

誰も居ない所から声が聞こえて来た。そこに光が集まって、とても美しい女の人が現れたではないか。その女の人はとても冷たい顔をして、二人に近づいてきた。

「我の名はゴッド・スター・シャイン。この世で一番偉い者、いわば神じゃな」

ゴッド・スター・シャインは明らかに笑っているが、目は紛れも無く睨んでいた。二人は何が起きたのか解らず、ぼけーっと立つていた。

「誰？この小母さん」

黄利が珍しく自分から話しかけてきたので、青水は少し嬉しかった。一方、ゴット・スター・シャインは、

「お、お、小母さんですって！？」

怒りを隠せないご様子。そして、手を空に向かって掲げた。その瞬間、漫画に出てきそうな杖が降ってきたではないか！！ゴット・スター・シャインはその杖を勢いよく掴んだ。するとその杖が光つて、青水と黄利は自分達の体が熱くなってくるのを感じた。そして

その熱さは、黄利は二の腕、青水は手の甲へと変わった。そしてその熱さも激痛へと変化した。そしてそれぞれの痛い所に、紋章のようなものが出来ていた。

「おほほ、我に逆らうからこうなったのじゃ。それは呪いの紋章じゃ、その紋章がある限り、おぬし達は我の奴隷じゃ。……ん？おぬし達、良く見るとカツコいいのお。少しぐらいフレンドリーにしてやってもいいぞ。ほれ、おぬし達、シャインちゃんと呼んでみい」

ゴット・スター・シャインがベラベラと喋り出したので、二人は呆れてしまった。

「もう面倒くさいから、ゴスシャで良くね？ほらゴット・スター・シャ……なんとかの頭文字をとって、な？良いだろ？」

奴隷の身である青水が馴れ馴れしく話しているためか、ゴスシャさんは怒りを堪えている様子だった。その怒りを何とか乗り切つて、ゴスシャさんはまた話し始める。

「おぬし達には、我の仕事を一つ、手伝つて欲しいのじゃ。今から送る所に奴隷たちがおるから、そいつらと協力してやっていてくれ」今のゴスシャさんの言葉が二人はしばらく理解できなかった。そして、

「え、送るつて、どういうこと？ちょいま……うわあああ！！」

二人はその場から姿を消した。

黄利君は引きこもり!?

(後書き)

DNGURIEは二人組なのですが、一人が話を考えて、もう一人が編集をしています。

頑張っつつくりますので、次回も楽しみにしててください。

「これは、なんていう町だ？」 (前書き)

ゴスシャさんに会った黄利と青水は彼女を怒らせてしまい、ラマル村から姿を消してしまった・・・

「これは、なんていう町だ？」

気が付いたら、二人は大都会にいた。青水が起き上がると、目の前で黄利がとても気持ちよさそうに寝ていた。青水はしばらく辺りを探っていた。どうやら二人は、テレビ局の目の前にいるらしい。すると、どこからかハンバーグの匂いがしてきた。その瞬間、

「ハンバーグ！！！！食べた~~~~い！！！」

普段大声を出さない黄利が、青水も出せないほどの大声を出したので、三秒ほどその場に立ち尽くしてしまった。黄利は鼻をひくひくさせると、テレビ局の方へ走って行ってしまった。・・・が、警備員に捕まったらしく、戻ってきた。黄利は何か思いついたらしく、顔には不気味な笑みがこぼれている。

「お絵描き魔法、発動！！！」

黄利は勢い良く叫んだ。すると、何処からか紙と鉛筆が出てきた。お絵描き魔法とは、黄利の精霊フェアリスの操り人としての能力で、描いた絵が本物になるというものである。青水が気付いた時には二人とも警備員の格好をしていた。どうやら黄利は警備員の制服を描いたらしい。二人は声をそろえて、

「おつかれです。もう交代の時間ですよ。」

と、叫んだ。警備員はあっさり行ってしまった・・・。

（うわ、俺達悪いことしてんなー。つーかよく、ばれなかったな。）

青水はそう思いながらも、黄利と一緒にテレビ局の中にはいってしまった。

どれだけ歩いただろうか。黄利は少し疲れたが、ハンバーグのために、歩き続けている。大きい扉の前についた。青水は扉を開けよう

としたがためらい、扉を開けようとしていた手を下ろしてしまった。
「俺達さつきまでド田舎の村にいたよな……。それでいきなりこんな大都会に来て、このテレビ局に入ったんだよな……。それじゃあゴスシャさんの思い通りな気がするんだ……。だから開けない方がいいと思うんだよな……。」
青水がそういつているのにもかかわらず、黄利は扉を開けてしまっていた。

「うわっ何やってんだよ!!!……………話変わるけどさ、ここは、なんていう町だ？」

青水は、黄利に尋ねたはずだが、女の子の声が返ってきた。

「ここはリグラータウン。一度は行ってみたい所ランキング一位の大都会よ。」

一人のかわいらしい少女が二人に近づいてきた。黄利はとても輝いた顔で、少女に問い掛けた。

「ねえねえ、ハンバーグは!？」
少女はにっこり笑って答えた。

「ああ、料理番組のヤツね……。そういえば名乗るのを忘れていたわ。私は紅亜。精霊の操り人よ。そして、知っていると思うけど、今話題の人気アイドル」

それを聞いて黄利と青水は声を揃えて言った。

「紅亜……。知らないなあ……。」
すると紅亜の目から涙がこぼれ始めたではないか!!!

「あんだ達……。この私を知らないの!?!これでも今週の人気アイドルランキング一位よ!？」

紅亜が怒っているのにも関わらず、黄利と青水は二人で会話していた。

「ゴスシャさんが言っていた、奴隷って何処にいるんだろう……。」

それを聞いた紅亜が顔に笑みを浮かべているのに、二人は気づいていなかった……。

こっちは、なんていう町だ？

（後書き）

今回は、DONGURIIのメンバーを詳しく紹介したいと思います。

まず、内容担当の黒虎こっこです。天然ですが、見逃してください。

続いて、編集担当白狐びゃっこです。まあ、たま〜に自分で書いた小説を投稿すると思います。・・・多分。

そして、新しくメンバーが一人加わりました。

美羽みうです。新人ですが、頑張ります。

私たちは学校の同級生で、学校でもたまに小説の事を話しています。次回も楽しみにしてください！

雷ちゃん誕生 (前書き)

いきなり大都会に来た黄利と青水。
そこで紅亜と言つ少女に出会つた。どうやら紅亜には秘密があるら
しい…

雷ちゃん誕生

黄利と青水は紅亜の家に泊まらせてもらった。どうやら朝のようだ。黄利は起きた瞬間、不自然なものを感じた。ふさふさしたものが、黄利に触れているのだ。そーっとそちらを見ると、赤ちゃんホワイトタイガーがすやすやと眠っていた。黄利がホワイトタイガーに触れると・・・

「ふぎやつ、んん・・・。ちよつとあんた！レディの体を勝手に触らないでよ！！あたしはピュアな女の子なのだもの？」

黄利はホワイトタイガーが喋った事にびっくりしてフリーズ状態になっっていた。

「あ、ごめん、名乗るのを忘れていたわ。あたしは雷、らい色の精霊よ、カラーフェアリーあれっ？もしかしてあんた・・・あたしのパートナー！？シヨックうゝこんな弱そうなやつがパートナーなんて・・・」

雷が話し終わった時には黄利の姿はなかった。黄利は隣の部屋にいる青水を起こしに行ったのだ。

「青水！青水！起きてよ！変な奴がいるよお。」

しかし、青水は起きようとはしない。そんな事をしているうちに雷が来てしまった。その時、青水が目を覚ました。どうやら雷は怒っているようだ。

「あたしを無視するなんて、いい度胸じゃない！あんたそれでもあたしのパートナーなの！？」

それを聞いた二人は啞然茫然。あぜんぼうぜんまるで「えっ、パートナーだったの！？」とでも言っているかのように。まあ、実際はその通りなのだ。雷は三秒ほど考え込んだが何かに納得したらしくポンと手を叩いた。

「ちよつと！さっきの話を聞いてなかったの！？あたしはあんたのパートナーなの！あんたが十三歳になったからあたしが生まれたのよ！そういえば、あんたたちの名前を聞いてなかったわね」

二人は面倒臭そうに自己紹介を始めた。まずは黄利から。

「ぼくは、黄利。これからよろしく。」

続いて青水。

「俺は青水だ。黄利の幼馴染でもあり、親友だ。」

『くすつ』という笑い声がドアの方から聞こえてきた。みんながそちらを見るとそこには紅亜の姿があった。

一分後、紅亜の家のリビング

「実は私もスター・シャインさんの僕しもへなの。あ、この子は私のパートナーの燐りんよ」

紅亜がそう言うと、真紅の色をした鳥が現れた。どうやらその鳥が燐らしい。

「わたくし、燐と申します。わたくし達はスター・シャイン様にあなた様方のチームに入るようにと命じられました。」

その言葉に黄利と青水は同時に同じことを思った。

（ゴスシャさん、勝手な人だな……。ん？紅亜が入ったらチームが作れるよね！？）

雷ちゃん誕生

(後書き)

色々と体調の問題で、書くペースが遅くなってしまいました。

後、活動報告にも書いてありますが、前の話の可笑しな点をいくつか直させていただきました。変なところがあったら、ジャンジャン教えてください。

by 黒虎^{くろこ}

紅亜とお料理？

リグラータウン、テレビ局。

「さあ今日も始まりました。『紅亜とお料理？』の時間です。今日、紅亜ちゃんとお料理するのは・・・萌葱もえぎちゃんです。」

司会者の言葉で一人の少女が出てきた。紅亜に続く人気アイドルの萌葱だ。今、黄利達はテレビ局で料理番組の見学に来ているのだ。普通の人なら大はしゃぎのはずが黄利と青水はテレビの電波が届かない田舎の村出身。その二人が芸能人の事を知っているわけがないので、二人ははしゃぎたくてもはしゃげないのだ。一方、紅亜はカメラの前でテキパキと料理を作っている。

「今回作るのはビーフシチュー。シチューはスープを作る時より野菜を大き目に切るのがポイントです！」

紅亜がビーフシチュー作りのポイントを説明すると萌葱が野菜を切り始めた。

「紅亜ちゃんは普段、シチューを食べたりすることは多いんですか？」

「はい、私はよくアイリッシュシチューという、アイルランドのシチューをよくつくります。シチュー類だったら他にも、ブイヤベールという、フランスの地中海側の地方の物や、ボルシチという、ウクライナの物も作りますよ。」

そんなアイドル二人組の会話を黄利と青水は暇そうに聞いていたが、ついに我慢できなくなったのか、小声で会話をし始めた。

「あの萌葱っていう人、おとなしそうだけどなんか裏がありそうだよね。」

黄利がそう言うと、青水が続けて言った。

「実はかなりの意地悪だったりして・・・それが、わがまま娘とか？」

青水はリグラータウンに来てから黄利が変わっているのになんとな

く気が付いていた。そう、黄利はリグラータウンに来てから口数が増えたのだ。黄利が変わったのが青水はなんとなくうれしかった。二人で色々と話しているうちに『紅亜とお料理?』は終わりを迎えていた。

「今回作ったビーフシチューは番組ホームページでおさらいできます。萌葱ちゃん、今日はありがとうございました。」

撮影が終わって二人のアイドルは互いに挨拶をした。

「紅亜ちゃんさすがね！シチューの事もよく知っていて・・・それけいしちやった」

萌葱がとてもさわやかな笑顔で褒めてくれたので紅亜の顔には笑みがこぼれていた。

その後、紅亜以外の誰にも聞こえないように小声で言った。

「あそこにいる見学の男の子たち、かつこいいね。私、気に入っちゃった?」

それを聞いた紅亜は少し複雑な気持ちに・・・

(あの二人がとられるのは正直いやだな・・・それに、あの二人が萌葱ちゃんの事を好きになっちゃったら私だけ仲間外れになっちゃいそうなんだもの)

ま、あの二人は恋愛にはまったく興味がないのだが。

紅亜とお料理？

（後書き）

いや〜色々とありまして、書くのが遅れてしまいました。しゅみましえん・・・

白狐の小説の話をしたり、インフルになったり・・・まあ、とにかくサボりまくってました。今後もサボるかもしれません。

b y 黒虎

迷惑をかけました・・・すいません

b y 白狐

『流』参上！

リグラータウン・紅亜の家

「どこ〜!？」

紅亜の家に声が響き渡る。いったい何があつたかと言うと・・・朝、青水が起きると小さな龍が掛布団の上に寝ていて、それが色の精霊だと分かると黄利と紅亜のパートナーである二匹を探し、互いに挨拶させることにした。が、その二匹の姿が見当たらないのだ。そして時は現在に戻る

「お〜い！ 雷どこに居るの〜？」

黄利が叫ぶと空間内に穴が開き、そこから雷と燐が出てきたではないか！！ 黄利はビツクリして尻もちをついてしまった・・・

「いてて、ちよっ、ちよっ。どこ行っていたんだよお〜!？」

黄利が尋ねると二匹は同時に言った。

「それはね・・・」

二匹の話をまとめるとこうなる。色の精霊は、別次元に行くことができるらしい。それが『フェアリーゾーン』。彼等は普段そこで暮らしていて、自分の主人が呼んだ時だけにこの人間界に来るらしい。黄利は話を聞き終えた後に、彼の後ろで青水と紅亜も聞いていた事に気付いた。

「わっ!! ずっと聞いていたの!？」

黄利が尋ねると、二人はコクコク頷いた。そしてこう言った。

「ずっと聞いていたぞ。あ、そうだ・・・俺にも今日、パートナーができたから紹介するよ。お〜い」

青水が呼ぶと小さな龍が物陰から顔を出した。そしてこう言った。

「オ、オレは流。よろしく・・・。」

小さな龍の流はちよこんとおじぎをした。すると、いきなり雷と燐が彼に近寄ってきた。流はおどおどしているが「あたしは雷。よろ

しくう〜」「わたくしは憐でございます」と挨拶されたので怪しい者達ではないと悟ったのか笑顔で握手なんかをしている。この時紅亜はひそかに考えたのだった。

（色の精霊って不思議な生き物よね……。明らかに脳みそが小さいのに人間より頭が良いのよね・・・）

そんな紅亜の考えを読み取ったかのように流が言った。

「色の精霊はフェアリーゾーンにある精霊樹という樹から情報を授かるんだ。だから必要な時に精霊樹から知識を取り出して必要ない時は樹にしまうんだ。それでね、それでね・・・」

その後、流の話は一時間ぐらい続いたのだった。こうしてcolorsに新しい仲間が増えたのだった。

同時刻

二つのチームがリグラータウンに降り立ったのだった。『The^ザDark^{ダーク}』と『Hell^{ヘル}&（&）Heaven^{ヘヴン}』というとても大きくて有名なチームだ。黄利はまだ知らなかった。リグラータウンで大きな事件が起こり、自分たち『colors』もそれに巻き込まれることを。とっても深く深くに。

『流』参上！ （後書き）

みなさんお待ちせしましたっ！ゴシヨモノです。突然ですが、この後書きのコーナーに命名をしたいとおもいまっす！名前は・・・ジャカジャカジャカジャン！『ゴシヨモノクラブ』です！みなさんよろしく願いまっす！次回のゴシヨモノはリグラータウンで事件が起きます！お楽しみに〜（@^v^@）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7739p/>

ゴシヨクノモノガタリ

2011年10月8日14時25分発行